

志賀直哉「小僧の神様」論

——「優しい」「家族」の物語——

永井太郎

1、研究の状況

志賀直哉の「小僧の神様」〔白樺〕大九・二）に関する研究は数多いが、その主要な論点はいくつかに絞られる。

この作品は、Aと仙吉という二人の主人公を持つ。そこで、作品の比重がどちらにあるのか、が問題とされる。多くの論では、Aの心理に主な関心が向けられる傾向にある。紅野敏郎は、仙吉の物語として始まったこの作品が、Aに比重が移っていくことを作品の「破綻」とした（作家・作品の鑑賞と研究 志賀直哉——鑑賞と研究 現代日本文学講座／小説4 白樺と奇蹟（三省堂、昭三七・三）所収）。それに対し、亀井雅司（志賀直哉の短編——その構造——〔国語国文〕昭四六・四）や森下辰彌（「小僧の神様」論〔近代文学論集〕平三・一二）。以下では森下aとする）は二人の記述が章ごとに交替し、その量が同等であると論じた。しかし、野口武彦は、章の交替を分析した上で、作者の関心は「Aの心事」にあると述べ（野口武彦『小僧の神様』と「小説の神様」——志賀直哉のストーリー・テリング（『海燕』（昭六〇・五）初出。『近代小説の言語空間』（福武書店、昭六〇・一二）所収）、山下航正は、亀井らの主張

をうけつつも、視点を厳密に考えると、仙吉の方が「語られる人物・見られる人物」としての性格が強いと、修正を加えた（山下航正『志賀直哉「小僧の神様」論——文学教材の語りと教材化をめぐる——〕〔国語教育研究〕平二〇・三）。

Aの心理で最も重視されるのは、彼が仙吉に鮪をおごった後に感じる「変に淋しい、いやな気持」である。この心情は、Aと仙吉の最初の邂逅での、仙吉を助ける事への躊躇と関連つけて論じられる。その際、Aが貴族院議員であることが重視される。Aの心情は、彼の階級に原因が求められるのである。

すでに小田切秀雄は、仙吉の直面した問題が経済であり、Aの心情を、「個人を相互に孤立化させ」る近代社会の本質に触れるものであるとした（「小僧の神様」〔大正文学研究会編『志賀直哉研究』（河出書房、昭一九・六）所収〕。高田瑞穂は、鮪屋でのAの躊躇は、自分と違う階層の他者の目を意識したためであり、「変に淋しい、いやな気持」は、階層の意識が人間としての共感を疎外したためであると論じる（『文芸読本I・10 志賀直哉』（成城国文学会、昭三三・六）及び『文学教室4 志賀直哉とその作品』（学友社、昭二四・一二））。本多秋五も「主人公Aと小僧の間に共感があつたけれども共

苦がないこと」「二人は所詮別世界の人間」の意識がAの心情の原因であるとする（『小僧の神様』など）（『展望』昭四四・六）に「鬼石谷戸から・18」として初出。『白樺派』の作家と作品』の昭和五〇年一〇月以降の版から所収）。遠藤祐は、Aの「冷汗」は貴族院議員であるという自意識のためであり、そうした意識が付きまとうため、行為に自然さが欠ける、それが「変に淋しい、いやな気持」の理由であると分析する（『小僧の神様』注釈）（『日本近代文学大系第三一巻 志賀直哉』（角川書店、昭四六・一）所収）。紅野敏郎や勝田和学（小説の主題をどう学ばせるか（六）——『小僧の神様』の場合——）（『東洋』昭五六・三）、鶴谷憲三（『小僧の神様』小論）（『国文学』昭六二・一）や大里恭三郎（『小僧の神様』の問題点）（『常葉国文』平三・一一）。以下では大里とす。大里には、時期的にこれに先行する論がある（後述）ため）にも、同様の見解がみられる。吉田正信はAが貴族院議員という政治家であることを特に重視し、「小僧の現実を政治問題として」とりあげない、「自己保身に逃れている後ろめたさ」によるとする（『小僧の神様』論——その構成と思想性——）（『愛知教育大学大学院国語研究』平五・九）。永井善久はここに志賀の民衆への恐怖を読む（『志賀直哉と群衆体験——『小僧の神様』の戦略——）（『文学研究論集』平九・二二）。

一方、Aの心情を貴族院議員という属性と切り離す見解もある。田近洵一は貴族院議員の規定にこだわることを批判し、「見ず知らずの人に恩恵をほどこす」ということは、本来、はずかしく気まりの悪いものである」と一般的な善行に伴う感情であるとする（『志賀直哉「小僧の神様」』（『日本文学』昭四〇・一）。同様に、林廣親も「境

遇に対する後ろめたさを確認できる記述はテキストに見いだしにくい」とし、「小僧のためより己の心の欲求を充たそうとしたまでのことではないのか」という疑惑」が「変に淋しい、いやな気持」の理由であると主張する（『志賀直哉「小僧の神様」を読む』（『成蹊国文』平一一・三）。これらの指摘は、Aの心情を普遍的な、善行に対する反省意識とするものである。趣を異にするのが山口直孝である（『小僧の神様』論——Aと仙吉との関係をめぐって——）（『日本文芸研究』平八・九）。山口はAと仙吉を鮎屋へ導くのが通への関心であるのとらえ、Aの中に、ともに通から拒絶されることによる共感が生じたにもかかわらず、それを優越感にもとづく「御馳走」に移行させてしまったことが、「変に淋しい、いやな気持」の原因であるとした。

Aが貴族院議員であることに解釈の重点が置かれることに対応し、仙吉の丁稚という身分に焦点があてられる。すでに、「弱い者貧しい者」（大野茂男『小僧の神様』のむすびについて）（『解釈』昭三〇・九）や「最下層」（勝田）などの一般的な指摘があったが、紅野謙介は「低年齢の労働者」として「子供ではあるけれど、決して無邪気で無垢な「子供」たりえない」と、仙吉を現実の具体的な状況の中で考察することを示唆した（『隔差をめぐるファルス——志賀直哉の短編を読む』（『月刊国語教育』平二・八）。頓野綾子は、当時の丁稚をめぐる言説をより詳細に分析し（『小僧の神様』——その「残酷」な関係——）（『中央国文学』平一五・三）、高口智史は抑圧された仙吉の「貧」への凝視」こそ、この作品のテーマであるとした（『貧』への凝視——『小僧の神様』論——）（『近代文学研究』平一五・二）。仙吉にとっての鮎についても、町田栄が「番頭」階

級のステイタス」と述べたように（『志賀直哉「小僧の神様」』（『国文学』昭五九・三））、その境遇から単なる食欲の対象以上の意味が付与される。頓野や高口、山下なども同様の見解を取る。

これに対し、松本常彦は、「奉公」を「修業」とする規範を持った社会が成立しており、仙吉がその中で「自身を主体化して行く」と、仙吉の境遇の悲惨さを強調する主張を相対化する（『小僧の神様』の小僧は、なぜ「はかり屋の小僧」か』（『九大日文』平一八・四））。林も同様の立場に立つ。上杉沙紀・片木晶子・金子結咲・熊倉萌・李娜娜・渡部麻実による注釈も、鮎を食べることは仙吉にとって、遠くない未来に実現可能な目標であることを指摘する（『志賀直哉「小僧の神様」再読のために』（『日本女子大学大学院文学研究紀科要』平三一・三））。

仙吉の境遇の問題が重視される一方で、仙吉の描き方には批判が多い。「非主体的な没個性しかない」（越智良二）「小僧の神様」と『芋粥』・『覚え書』（『愛媛国文研究』昭六二・一二）などといわれるところだが、その批判の中心となるのは、Aを神様とみなしたと描かれる点である。これに対しては、「飛躍がある」（吉田）「観念的」（田近）「幼稚」（北條元一）「志賀直哉の『小僧の神様』と創作方法の問題——『外套』と『芋粥』と比較して——」（『世界文学』昭五七・八）「貧しい精神世界」（高口）など、リアリティのなさが指摘される。一方、仙吉の認識に一定の妥当性を認める見解もある。林は仙吉なりに「論理的」であるとし、頓野や宮越も同様に肯定的である。作品全体のテーマは、Aと仙吉の関係性に求められる。問題となるのは、Aが仙吉とともに鮎を食べなかったこと、そして二人が二度と会わなかったことである。両者の関係性の欠如が、社会的格差

の問題と個人相互の理解との関連でとらえられる。その前提として、両者が正面から向き合い、直接的関係を持つことがあるべき事態として想定される。小田切や高田に既にこうした指摘がみられ、遠藤もAが仙吉と結びつきをはかるうとしなかったことを問題視する。大里bや鶴谷にも同様の指摘があり、頓野は柄谷行人の固有名に関する議論を用いて二人の関係を批判する。勝田は作品のテーマを「社会的な階級差は人間を疎外し、相互理解の成立を困難なものにする」とまとめた。多くの研究も、それぞれ強調する点の違いはあるものの、おおよそこうした理解に収まるものである。上杉らが、Aの誤解によって、二人が二度と再会しないことが、小僧の目標を守ったと、二人が会わないことを肯定的に評価するのは例外的である。

両者の関係性の欠如から、志賀直哉の限界が導かれる。志賀文学では珍しく、階級の問題をとりあげたことが評価される一方で、最終的には、問題が回避された、と批判されるのである（金達寿）（『志賀直哉「小僧の神様」』（『岩波講座 文学の創造と鑑賞』第一巻（岩波書店、昭二九・一一）所収）、高田、本多、野口、鶴谷、越智、大里b、吉田、永井、高口など）。

Aが仙吉におこるといふ行為を、贈与の問題として独立して取り出したのが、中沢新一（『カイエ・ソバージュⅢ 愛と経済のロゴス』（講談社、平一五・一）序章）と斎藤努（『廃棄される純粋贈与——志賀直哉「小僧の神様」——』（『龍谷大学大学院研究紀要 人文科学』平一一・一））である。神話や人類学の見地から、Aの行為は、交換を期待しない、純粋贈与であると考えるのである。中沢は、Aの行為は、我々の経済や社会の前提となる交換の原則を超えた、神が本来行う行為であり、それが他者の賞賛を期待する善行と思わ

れるようになったことがAを苦しめるとする。斎藤は、Aと仙吉の関係性の欠如を問題とする議論は、その行為を、交換を前提とする贈与と見たためであるとして、Aの行った純粹贈与と区別する。また、両者とも、Aが仙吉と一緒に鯨を食べなかつたことを、上下関係を作らない、仙吉への配慮として肯定する。瀧田浩はこれを受けた議論であり〔里見淳〕かね論——貨幣蒐集と欲望——〔二松学舎大学論集〕平一九・三三）、高間康広はAの行為が純粹贈与であるにもかかわらず、彼自身は貴族階級に属する矛盾が「変に淋しい、いやな気持」を生んだと、あらためて階級の問題からとらえ直す〔神様を批判する構造、成長を許可された近代文学——小僧の神様〕論——〔二松学舎大学人文論叢〕平二一・三三）。

最後に問題となるのが、「摺筆」である。Aの住所を訪ねていった仙吉がそこに稲荷を見つけて驚くという結末が「惨酷」だからという理由で実際に書かれなかったことを記す箇所であり、廃棄されたプロットが示されていることから「見せ消ち」ともいわれる。鷲只雄は蛇足であるという遠藤の指摘を批判し、これを「新しい技巧」として評価した〔「南京の基督」新攷——芥川龍之介と志賀直哉——〕〔「文学」昭五八・八〕。Aを神とすることが仙吉への愚弄になることへの「人間としての心情的抑制」と、Aに嘘の住所を書かせたことの展開を完結させる「芸術家としての必然的要請」とを同時に満たすが、この「見せ消ち」であると分析したのである。驚のように、予定したプロットの廃棄を志賀の人道性にとらえる論は多い（田近、遠藤、越智、吉田、高口など）。Aへの批判であるという町田や栗林秀雄（志賀直哉論ノート（二）——「范の犯罪」と「小僧の神様」の読み——）〔「日本文学研究」平八・二二）、山下も同

様である。一方で、すでに志賀は仙吉にお稲荷様を信じさせていると批判する見解もある（大野、北條、紅野敏郎、野口など）。また、「作者」が顕在化する点について作者の絶対性を示すとするのが、林、瀧田、小平麻衣子（「研究へのいざない」志賀直哉「小僧の神様」を読む）〔「語文」平二三・三三）である。仙吉を無知のままに限定することが「作者」によって示されたとする高橋博史（志賀直哉「小僧の神様」に描かれた鯨（白百合女子大学言語・文学研究センター編『アウリオン叢書02 文学と食』芸林書房、平一六・七）所収）もこれに近い。それに対し、大里恭三郎（『小僧の神様』の方法——付記の意味するもの——）〔「常葉国文」平二・二二）大里a）や高口は、Aと小僧を自由に操作するプロットの放棄を、「作者」（高口はここにAも含める）を神とすることへの批判だとする。永井は、「作者」の登場をAと小僧の対立からの回避であるととらえた。

2、論点の検討

以上、簡単に解釈上の論点を紹介した。次に、主要な五つの論点について検討していく。

2-1、Aの心理の重視

まず、Aの心理の重視についてである。二人の記述の量がほぼ同等であることは先行研究の通りである。しかし、仙吉が主に記述されていても、心理が描かれない場合がある。それが、仙吉が鯨を食べる、六章の一場面である。

仙吉は其処で三人前の鯨を平げた。餓え切つた瘦せ犬が不時

の食にありついたかのやうに彼はがつ／＼と忽ちの間に平げて了つた。他に客がなく、かみさんが故と障子を締め切つて行つてくれたので、仙吉は見得も何もなく、食ひたいやうにして鱈腹に食ふ事が出来た。

ここでは、仙吉が鰯を食べる様子が外から描かれる。Aが主になる章では、常にその心理が描かれる。特に、この六章は、Aの「変に淋しい、いやな気持」が描かれる七章が続くため対照的である。こうした点がAの心理が重視されていると評価される原因であろう。しかし、大里bにも指摘があるように、「小僧の神様」は、仙吉の記述で始まり、仙吉の記述で終わるといふ枠構造を持つ。さらに、後述するが、両者の行動に注目すると、明らかな相同性がある。以上の点からも、Aにのみ作品の比重があるといふ解釈は妥当ではない。

また、Aの心理が重視される理由として、その内容も関係すると考えられる。Aは行動と心理の間で内的な葛藤を経験しており、それが作品全体のテーマと深く関係するとされる。我々は内的葛藤があるところに「問題」があると考えるのである。それと表裏一体の事態として、葛藤を経験しているようには見えない友人のBやAの妻への評価はあまり高くない。同じく、仙吉によるAの神格化についても否定的にとらえられる。これについては2-13でくわしく検討するが、心理的葛藤の有無がテーマ的な重要性を決定するとは必ずしも言えない。

2-12、社会的格差というフレーム

次に、社会的な格差、階級への関心についてである。多くの研究は、この作品を社会的格差というフレームで解釈する。Aが感じた

「冷汗もの」という意識も「変に淋しい、いやな気持」も、彼の階級が背景にあることが主に論じられる。しかし、この二つの心理について、次のように考えることは十分可能である。最初の邂逅でのAの躊躇は周囲の他者の目を意識したため。二度目の邂逅で小僧をおごつた後の心理も、他者の目があったため躊躇したことの反省もたらした行為であることが意識されたため、仙吉への善意と実行の間の自然性が自身にとっても疑わしいものとなった。こう考えて、大きな不自然はない。つまり、田近や林の言うように、Aの自意識については、階級の問題を持ち出さなくても十分理解できる。

この心理を、多くの研究は階級の問題と関連づけている。それはAがはじめて登場した際に示される、貴族院議員という属性に注目することによる。そのことと、仙吉が丁稚であるという社会的身分との対比が、作品の基本的な構造であるといふ認識から、こうした関連づけが正当化される。ただ、簡潔な志賀のテクストでは、最初の登場以外で、階級を示唆する記述は少ない（Bの存在、Aの経済的余裕、鰯を取り寄せる妻など）。そこで、しばしば、貴族院議員に関する同時代の社会的背景の分析に目が向けられる。

社会的経済的格差を生産・再生産するシステムを問題にするために、仙吉についても、その抑圧された状況が焦点となる。格差というフレームで作品を読むことで、「あまりに喜劇的な悲劇」（紅野謙介）を批判し、「ハッピーエンドの物語」の「イデオロギー装置」（高口）を暴き出す。つまり、単なるいい話で終わらせることなく、批判的に作品を解釈しようとするのである。

2-13、仙吉によるAの神格化

仙吉によるAの神格化の評価は低い。しかし、八章に書かれた言葉を見る限り、Aをお稲荷様と見る仙吉の心理を否定的にとらえた表現は見られないのではないか。仙吉がAをお稲荷様と判断した根拠として、伯母が狐憑きになったことがあげられている。こうしたエピソードの設定は、仙吉が何者かをお稲荷様とみなすことが、仙吉自身の文化的環境の中で不自然ではないことを示そうとするものである。仙吉の判断は、我々の日常的常識からだけではなく、作品内の現実においても、誤った、無知にもとづくものである。しかし、非現実的な世界を構築していたとしても、それが作品において否定的に見られなければならない根拠にはならない。自らの行為の自然性に疑念を抱くAの心理を「淋しい、いやな」と否定的にとらえることと対比するなら、内的矛盾を持たない仙吉の信仰を肯定的にとらえることも可能である（仙吉の場合は、内的確信と作品内の外的現実との間に矛盾があることになる）。これは仙吉の造型が成功しているか否かとは別の問題である。仙吉によるAの神格化を批判するのは、テキストに現実性を求めることであり、知と無知を対立させ前者を優位に置く立場にもとづく。こうした解釈には留保が必要である。それが支持されるには、テキストに仙吉のありかたを否定する積極的表現を見出す必要がある。それは「摺筆」と関係することになる。

2-14、関係性の欠如

両者の関係性の欠如に関する議論でも、同様の問題がある。すで

に林が指摘しているが、Aと仙吉が個人と個人として人間的な関係を結ぶべきであった、あるいは他者として相手を認識すべきであったというのは、あくまで論者の理想とする関係性を前提とした上で議論であり、一つの倫理的立場の選択以上のものではない。また、Aと仙吉が再会しなかったことが、階級の差をこえなかったとして批判されるが、これも階級という相当程度変化しにくい対立を重視したことによる。こうした解釈では、作品の終わりの両者の懸隔が望ましい状態ではないということが前提となっている。しかし、「他者の生の行方の不可知性というアポリア」を描くものとして、両者の懸隔を否定的にとらえない、林のような主張もある。論者の他者観において、作品が描く関係性を問うべきではないか。

2-15、「摺筆」

「摺筆」の問題は、その「見せ消ち」という形式にある。従来の争点は、「見せ消ち」の下に、書かれた表現が見えているではないか、いや、やはり消しているではないか、という対立である。作者の絶対性に関する議論も、操作の内容に注目するか、操作したということそのものに注目するかの、対立である。登場人物を自由に操作するプロットを放棄したではないか、いやプロットの放棄が自由にできることを示すこと自体が作者の絶対性を示しているのではないか、ということである。

ここでは、「摺筆」が、作品内の仙吉の位置づけを決定する点に注目する。先述したように、「摺筆」前までの記述では仙吉によるAの神格化を否定的にとらえる積極的表現はない。最後の「摺筆」で、当初構想したプロットが仙吉に対して「惨酷」であるという記述と

関連させられることではじめて、Aの人格化の否定的位置づけが正
当化される。「擱筆」の解釈は仙吉をどうとらえるか、作品全体の
テーマと不可分である。

以上の論点の検討を踏まえて、作品の分析に入る。

3、「小僧の神様」の物語類型

2-1では、章ごとの記述の交替に加えて、作品の枠構造から考
えて、Aを重視する解釈を批判した。さらに、2-3では、仙吉の
心理を否定的に見る見解を批判した。亀井や森下aの主張に加えて、
これによって、Aと仙吉が対等な主人公であることをより強く主張
することが可能となる。次に、2-1で簡単に触れた、Aと仙吉の
行動の軌跡について考察する。心理ではなく、行動に注目すること
で、両者の相同性を明確にする。

Aと仙吉の行動の相同性については、森下〔「小僧の神様」(近代
小説(都市)を読む)〕〔双文社出版、平一・三三〕所収。森下b)、
宮越に既に指摘がある。Aと仙吉それぞれにとって、内の領域と外
の領域に作品世界は分割される。Aにとって内の領域は、Bとの付
き合いや妻との生活の世界である。仙吉にとって、内の領域は丁稚
として奉公する秤屋の世界である。それぞれにとって、鮎屋は外の
領域、境界領域にあたる。両者にとつての外の領域が、鮎屋で一致
する。

ロトマンは物語の登場人物を「不動的登場人物」と「動的登場人
物」に分類した。前者は固定され、「自分の環境を変えることができ
ない」のに対し、後者は、「ある環境から別の環境へという運動」の

機能を持つ。ロトマンはまた「不動的登場人物」は、「擬人化された
状況」であり、「自分の環境の名前」であるともいう(ロトマン『文
学と文化記号論(岩波書店、昭五四・二)第9章「文化のタイポロ
ジ」の記述のメタ言語について)。つまり、「不動的登場人物」と
は、ある領域がどういふものかを示す存在である。「小僧の神様」で
言うなら、Bと妻はAの内の領域を示す「不動的登場人物」であり、
一章で登場する番頭たちは仙吉の内の領域を示す「不動的登場人物」
である。屋台の鮎屋の主、仙吉を連れていった鮎屋のかみさんは境
界領域を示す。そして、固定された領域を横断していくのが、Aと
仙吉である。彼らはともに、内の領域を出て、境界領域で出会い、
再び内の領域へと帰還する。二人の主人公は、瀬田貞二がいう「行っ
て帰る」という物語の基本的な構造(瀬田貞二「幼い子の文学」(中
央公論社、昭五五・一))に従っている。

最初の邂逅では、二人の意図は不成功に終わる。仙吉は鮎を食べ
られず、Aは仙吉におおることが出来ない。ここでの失敗が、彼等
の意図とそれを阻むものの存在を示し、それぞれの状況を浮き彫り
にする。両者を阻むものが、他者の視線であり、社会的格差である。
二回目の邂逅で、二人の意図は実現する。物語の主人公は、欠如し
ていたものを獲得し、変化する。二人も、目的の対象の獲得に成功
するのだが、どちらもある屈折(Aは内的に、小僧は内部と外部の
間)を抱え込むことになる。

4、Aの物語

従来の研究では、Aと仙吉の意図を阻むものの考察が主であった

のに対し、本論では、両者が獲得した対象について考察する。まず、Aからである。

従来、Aの問題として、貴族院議員という階級の問題に焦点が当てられてきた。2-2で論じたように、それはAが三章で最初に登場してきたときの、「若い貴族院議員のA」という規定を重視したことによる。Aと仙吉の階級差は「小僧の神様」の世界を構成する重要な要素であることは間違いない。それに対し、本論ではAのもう一つの属性に注目する。それは、Aが仙吉と再会する五章の冒頭で提示される。

Aは幼稚園に通つて居る自分の小さい子供が段々大きくなつて行くのを数の上で知りたい気持から、風呂場へ小さな体量秤を備へつける事を思ひついた。そして或日彼は偶然神田の仙吉の居る店へやつて来た。

ここでAは父親として登場する。従つて、Aを規定する要素は、貴族院議員と、父親である。前者の属性との関係に友人のBがあり、後者の属性との関係に妻がいる。二つの属性がどちらもAと仙吉との邂逅の場面で示されていることから、彼が父親であることの重要性は明らかである。従来の研究は、彼のこうした属性に問題として関心を持たなかつた。Aの行動・心情を、父親のそれとしてとらえることで、本作品を再考する。

Aは、まず「若い貴族院議員のA」として登場するわけだが、貴族院議員という地位が世襲であることは、様々な研究が指摘するところである。それは一つの階級を意味するわけだが、それとともに、Aが「父の子」であることを示す。Aは自由な「子」として友人と気ままな趣味の話をする。それが鮎屋での彼と仙吉との邂逅を結果

としてもたらず。四章で、Bと鮎の食べ方の話をした後、Aは仙吉の話をする。これは、Aにとって鮎よりも、仙吉という子供の存在の方が印象に残ったことを意味する。では、なぜ仙吉の存在が気になつたのか。それは、彼自身に子供がいるからである。

今、幼稚園に通う子供がいるということは、彼が日常的に子供と接しているということである。そうした経験が、自分の子供だけではなく、その周囲にいる子供、そして、子供そのものへの関心を彼に抱かせたことは想像に難くない。それを示すのが、七章での妻との会話である。Aは、自分の子供の体量秤の話をした後、「それはさうと、先日鮎屋で見た小僧ネ、又会つたよ」と妻に話し、妻も「まあ。何処で?」と答えている。これは、彼が仙吉のことを妻とすでに話したことがあることを示唆する。彼と妻との間では、自分の子どもの話をし、そしてそれが自然に他の子供の話に移っていく。妻との会話において、子供そのものが主要な関心事なのである。こうした彼の父としての心情・子供の庇護者としての心情が彼に仙吉への同情を抱かせたのである。

そのことは五章でも明らかである。ここでAは子供の体量秤を買いに、つまり子供のために行動する父である。彼が子供のために行動していた時に、仙吉と再会したということが重要な意味を持つ。彼は、そういつた時だからこそ、父として仙吉のために何とかしてやりたいと思つたのである。遠藤が指摘するように、「妻や子供に対する愛情を、秤を買うという行為に具現」している時だからこそ、「妻や子供にしたように、仙吉も喜ばせてやりたい」と思つたのである。中沢や斎藤は、Aの行為を純粹贈与とするが、仙吉への贈与の前に、自分の子供への贈与があり、仙吉への贈与はそれを反復した

ものなのである。

Aは最初に「父の子」として気ままな友人との趣味の共有のため、自分の日常から外の世界に出る。しかし、そこで経験したのは、自分が父であることの確認であった。「小僧の神様」は、Aが父としての自己を確認する、Aが父になる物語である。

父としての庇護感情から仙吉に鯨をおごったAは、中沢や齋藤の言うように、彼に心理的負担をかけない（交換を強いぬ）よう配慮したと考えられる。しかし、他者の目も意識せずにはいられない。それを同時に実現するのが、金だけおいて去ることである。事後的に振り返った時、両者の差異が自己の中で拡大されたのが、「変に淋しい、いやな気持」の内実である。

そして、Aが父になる物語だからこそ、Aのエピソードは妻との場面で結ばれる。従来の研究では、「Aの側での内省を弱いものにして」る（川上英明「小僧の神様」（西尾実監修『作品研究志賀直哉の短編』（古今書院、昭四三・二）所収）、Aの心情の「希釈」（紅野謙介）、仙吉との「回路を切断」（頓野）、問題の「回避」（勝田）など、妻の役割の評価はおしなべて低い。これはAの日常への還帰を階級問題の回避ととらえるためである。しかし、「小僧の神様」をAが父になる物語と考えると、妻の言葉は新たな意味を持つ。Aの「変に淋しい気持」を「さう云ふ事ありますわ」と肯定する妻の言葉は、Aの心情と行為を、父としての行動であると理解し、好感を持って承認したのである。一度した仙吉の話題を改めて繰り返すということは、妻が仙吉の話をいやな顔せず、受け止めたことを意味する。二人は、自分の子供ではない子供に同情する感情を共有している。「小僧は屹度大喜びでしたわ」はAの行為を肯定する言葉であり、仙

吉の幸福を願う言葉でもある。ここには、やや屈折しながら仙吉のことを思う夫と、そんな夫を好ましく思い、他人の子の幸福をも願う妻の、二人の姿が描かれているのである。

確かに、「変に淋しい、いやな気持」の問題は解決されていない。しかし、この作品は問題のドラマティックな解決を描かない。むしろ、ある問題を抱えながら、それでも過ぎていくのが日常というものであることを描くのである。彼にとつての問題の未解決が、「神田の其店」や「其鯨屋」の回避という身体的行動に習慣的に示されることがそれを示唆する。「俺のやうな気の小さい人間は全く軽々しくそんな事をするもんぢあ、ないよ」というのは、高橋も言うように、直前に記された、自宅への鯨の取り寄せの提案を指し、Aの拒絶の意思が強いことを示す。

5、仙吉の物語

4での意図は、「小僧の神様」を、2-2で述べたような階級のフレームではなく、家族というフレームで読むことである。次に、仙吉の物語を、労働者ではなく、父と対になる子供の物語として考察する。

まず着目するのが、なぜ仙吉の奉公先が秤屋なのかという問題である。これについては、紅野謙介が「はかる」ことは、対比することであり、Aと小僧の階級間格差を示すとした。齋藤は、「仙吉が均衡II交換を行動の原理とすること」を意味すると言い、林は生の行方の「はかり」がたさがテーマと論じた。松本はそれぞれの社会集団が持つ相対的に独立した秩序感覚をさすものとして「はかり」を

捉えた。しかし、秤は、Aの子供の体重をはかるものとして登場する。つまり、秤は子供の成長の象徴である。この秤が、Aの子供を介してAと仙吉をつなぐ。それはAの子供と仙吉を重ねることであり、仙吉も同様に成長する存在であることを意味する。森下aはこれを「仙吉とはまず、刺激に反応して外へ伸びようとする力」であるとした。本論では、松本の言うように、仙吉の境遇が、それ自体の秩序を持った社会であるということを前提に考察を進める。

物語は欠如から始まる。仙吉に欠けるものは何だったのか。一つは鮎を食えないことである。もう一つは貧困であり、階級的劣位である。それとともに孤立ということがある（吉田、山口、頓野、岩崎希世美（『小僧の神様』論——語り手の視点に添って——）（『模国文』平八・三）など）。仙吉は誰とも会話をしていない。周囲から隔絶している。それが、Aとの邂逅によって、苦しい時に必ず思う、「或慰め」を与えてくれる存在を獲得する。

これについては、2・12で先述したように、しばしば安易なハッピーエンドとして批判される。根拠となるのはやはり階級である。それに対し遠藤は作品の印象を「積極性を帯び」たものにすると言い、町田はAと対比して「勤労者の健全性」をみる。林も肯定的であり、越智も「誠に幸福な物語」というがややシニカルである。家族に触れるのが岩崎である。岩崎は「悲しい時、苦しい時」に思う相手がAしかおらず、お稲荷様にAを見立てることで、「心の家族」を得たのだと論じる。「悲しい時、苦しい時」に思う相手としては、父・母や家族があることが多い。それが「小僧の神様」では「あの客」（A）になっている。それは、「あの客」（A）が父に相当することを意味するのではないか。仙吉は、自分の親のような庇護者と

して、「あの客」を思うことで、奉公の世界の中で生きていく力を得るのである。

この解釈は、十章の「擱筆」の直前の仙吉の心情を肯定的にとらえるものである。2・13で、仙吉のAの神格化を根拠のあるものとみなした上で、2・15で、それが「擱筆」によって否定されると指摘した。従って、仙吉を肯定するためには、「擱筆」の解釈を検討する必要がある。その際、「惨酷」の言葉で否定したものが何を指すのか、が問題になる。従来、ほとんどの研究は、仙吉がAをお稲荷様とみた錯誤の状態を指すものとした。彼の錯誤が修正されていない限り、仙吉が無知であり続けることが「惨酷」ということである。しかし、テクストでは、「それが人間か超自然のものか、今は殆ど問題にならなかつた」と記す（林もここに注目し、仙吉を肯定する点で本論と共通する）。ここで仙吉は、Aを神とみなす非日常的な状態から日常に戻っている。もし、仙吉を錯誤のまま置くなら、こうした記述はなくてもかまわない。これは、仙吉が変わりうる存在であることを意味する。さらに、時間の問題がある。「小僧の神様」の時間は、一章から始まり、二章三章はその二、三日後、四章はそれから余りたっていない時点の出来事である。五章の二人の再会も最初の邂逅からそう離れたことではない。六章七章八章は、五章と同じ日のことである。仙吉がAをお稲荷様と思ったのは、作品の記述では、彼と出会ったその日の夜だけである。そして、「日と共に」とある九章は、Aの行為が習慣化するところからある程度の時間がある。さらに、十章では、「あの客」（A）のことがますます忘れられなくなり、「悲しい時、苦しい時」必ず彼のことを思ったとある。一週間やその程度では、「悲しい時、苦しい時」必ず彼のことを

思ったとは言わないのではないか。すると、十章の仙吉の変化は、かなりの時間の幅を持つ。そうした時間の中で経験した変化を、「擱筆」前のプロットは、最初の一日目の状態に戻ってしまうのである。「慘酷」は、錯誤以降の仙吉の状態すべてではなく、それ以降の彼の変化の時間を無化することにある。従って、「擱筆」によって「慘酷」を回避することは、現行の本文の仙吉の状態を肯定することである。仙吉の変化・成長の肯定こそ物語の最後に「作者」が示そうとしたことなのである。

6、「家族」の物語

最後に、再度「擱筆」について取り上げる。「擱筆」について、その対象を5では問題にした。「擱筆」は、さらに読者へ一定の方向の解釈を促すメッセージでもある。「作者」（語り手）は「慘酷」だから、最初のプランを放棄したと記す。「作者」は廃棄したプランを示すことで、自らがある選択をしたことを明確化する。それは、「作者」が「慘酷」ではないこと、物語を「優しい」ものとして提示しようとしたことを意味する。そして、そう語ることで、これを読む読者にも、仙吉に対する同じ「優しさ」の共有を求めている。テクストは、この物語を「優しい」物語として読むよう促しているのである。

その「優しさ」とは「家族」の「優しさ」である。Aと仙吉は互いのことを知らないが、読者には、両者の姿が一組の親と子として提示される。二人の親の自足する姿と、ある子供の自足する姿が描かれる。両者には接点がない。2-4で論じたように、従来は両者

の懸隔を、望ましくない状態ととらえた。しかし、4と5で論じたのは、両者が無交渉ながら、それぞれ望ましい状態を得たということである。それは、Aの、仙吉という「子」への「親」としての愛情から帰結する。両者の懸隔が変化しないことではなく、懸隔があるにもかかわらず、親の愛情が、その階級間格差をこえて、両者に望ましい状態をもたらしたというのが、作品の示す答えである。これは、階級をこえた「家族」の物語である。

この「家族」の関係は全く無根拠である。それが家族ではなく、「家族」とした理由である。Aと仙吉の関係は、偶然、見かけただけの子供に、偶然、しかも一時的に愛情を抱いただけである。このことが、両者の関係の欠如として否定される。しかし、2-4で論じたように、他者への積極的で継続的なコミットメントを前提としなければ、これは他者への無根拠な同情の肯定と見るべきである。それまで貧しい子供に関心を持っていなくても、ふとした時に抱いてしまう同情があり、それは価値があるというのが「小僧の神様」の「倫理」である。血のつながりに限られない「家族」が、「小僧の神様」が描こうとする「優しさ」である。

注

(1) 宮越勉は、これについて、山口の「通」説が小僧にはあてはまらないと批判する（「小僧の神様」を精読する——接近と隔絶の線対称構造分析を中心に——）（『文芸研究』平二・一〇）。

(2) 中沢や斎藤のように、Aの行為を仙吉の心理的負担に配慮したとするものに、田近や大里b、宮越がある。しかし、いずれの論も、そ

れが関係性構築の不成立を結果としてもたらしたと否定的に考えている。

(3) 三好行雄が「小僧の神様」(『現代日本文学アルバム第6巻 志賀直哉』(学習研究社、昭四九・二)の「志賀直哉主要作品鑑賞小辞典」の一項目)で、「一種の^{みせぢ}見消」と呼んだのがはじめである。三好は、これを、「小僧を愚弄する(惨酷)と神様にされたAの羞恥を同時に救う巧妙な効果」と述べた。

(4) 松本に、大正五年に長女を、「小僧の神様」発表の半年前に長男を亡くした志賀の、子供の成長を見守る目が小僧に注がれているとの指摘がある。

(5) 林はこの点にも「心の要求のままに(他者)に関わる行為に及んでいるのかどうか」という問いに「よし」とする答え」と触れている。ただ、これ以上の説明はない。林論と本論はいくつかの点で重なる。階級というフレイムや関係性の欠如への批判、仙吉のAの人格化の変化、それが当日だけということも指摘している。しかし、やや説明不足であるように思われる。二人の再会後の時間の経過や「擱筆」の分析などが不十分である。また、Aに対する見解は本論とは違い、家族というフレイムはとらない。「他者の生の行方の不可知性というアポリア」がテーマというのも、両者のつながりを主張する本論と大きく意見を異にする。

また、上杉らは、可哀想な貧者として一方的な誤解をしたAと実際の小僧との間にはギャップがあり、Aの誤解にもとづく不介入の決意が、結果的に、小僧が伝統的な商家の世界の中で彼自身の生を生きていく「明るい未来像」を描くことを可能にしていると主張している。小僧の可能性の議論については、本論の主張とも一致する

が、Aの不介入のみ肯定するのではなく、Aが小僧に縮をおこったことの意味が軽視されすぎている。